

しのみつのすべらぎに云々、櫻陰比事に鶯の殊更に囀るに、三光ありくと聲のあやきれしたる、雅筵醉狂集に、鶯の月日星となくを俗に三光と稱するなり、片言に、日月ほしとなくとごきふせうとなくは同じ鶯なれども、ならはしがらにて、よくもあしくもなる、堀川百首題狂歌、よみ人不知、山ざとや非時過ぬれば鶯の鳴なる聲は五器ふせうとか、三光と呼種々あり、鶯の聲は三光を呼とも聞えぬものなり、日光山の三光鳥は、月日星と啼、山鵲は月日星々とかさね、又桑鷹は月星となけども、是も三光鳥の名あり、略又下學集に、まめうましとりと有、次にいふひしりごきも、此鳥の啼聲なり、伊勢にて玄いのごきと云ふも、これが啼聲によれり、聞なしにて異なるなり、

〔春鳥談〕宇俱比須總論

京大坂には三光を囀るを至れりとす、又近來吉日と鳴を佳として流行す、略江戶にては多く上方の鶯を賞せず、もつはら法華經と人の唱ふる如く、たゞしく啼くを貴ぶなり、但しその法華經とたゞしく啼く鳥は得難きなり、また法華經ときこゆる中に、なほ種々好惡ありて、かつ音色にも、太口細口あり、ふとくちとは、こゑには、の有るをいふ、ほそくちとは、こゑには、の少きを云也、音色はいかにも美にして、高尚に聞ゆるを佳とす、上品なるは細口にあり、然れども太口に於て音の最優美なるには、如シカざる也、又聲の俗にいふ黄色に光るやうなる音色あるは、藪口と卑めて、口調佳也といへども、畜ざる事也、すべて鶯は、一聲は高く、一聲は中音、一聲は低く、律中呂を雜へ啼くもの也、其高きをタカ子といふ、是律也、其中音をナカ子といふ、其低きをサゲといふ、是呂也、普通にこれを上中下の三音といふ、其三音の中に、サゲを肝要として、鶯の勝劣は、多く呂音サゲにあり、上はヒイと發し、中はホウー下はホホホーと啼を玉と呼ぶ、又總て發音をダシと呼び、法華經と啼をムスビと呼ぶ、但し法華經の假字はホケキヨオと聞ゆ、かくてホケキヨオのキとヨと分りて聞ゆるをカナグチといふ、キヨオと經の字音に聞ゆるをムジグチといふ、按ずるにカナ